

学習会(子ども会)だより 2月号 外編  
**MY SKY 臨時号**  
**マイ スカイ**

1996年2月発行(毎月第2・第4土曜後の火曜日定期発行)

発行者  
 板野中学校  
 学習会  
 編集・文責:吉城正士

いよいよこの21日に、劇団はぐるま座による「亡国の構図」を、文化の館・さくらホールで観劇することになります。もう劇の内容についてよく知ってるみなさんも多いようですが、この機会に各クラスで、本資料をもとに、担任の先生からしっかりと学習してから観劇し、劇を十二分に楽しみたいと思います。学級担任の先生方、よろしくお願ひします。

この劇は、途中10分の休憩をはさんで、第1幕と第2幕からできています。それそれに16場面、14場面からできいて、中には解説者が登場し、当時(明治時代)の状況を解説してくれる場面もあります。さて、それでは場面にそって劇の解説をしていきます。第一幕・第一場の始まりです……拍手……。

## 第一幕

一・一

「鉱毒悲歌」合唱の中、正造と農民がステージにあらわれます。

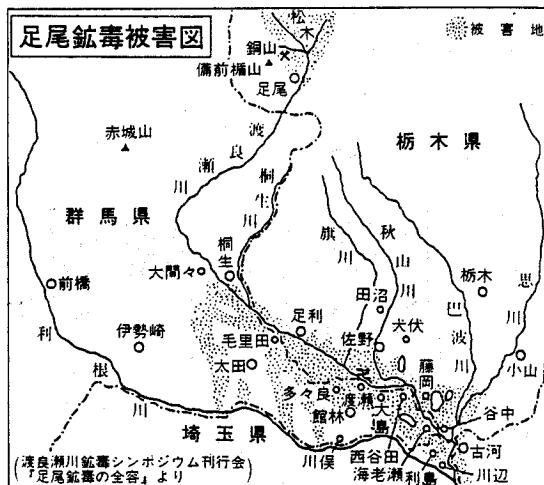
一・二

明治十八年(1885年)から渡良瀬川の魚類の大量死が起きてきます。たびかさなる大洪水とともに栃木、群馬両県、八十九ヶ村で一粒も穀物が実らなくなり、被害農民は

四〇万人にも達していました。渡良瀬川の恵みのもと汗水ながしてながら暮らしてきた「仙吉」「為市」「トメ」らにとって、この被害は、たえがたい苦しみとなっていました。しかし、この被害は天災ではなく、鉱毒による被害だということが、当時の農科大学の調べで明らかになってきました。

### 一・三 (場面は国会にうつります)

第一回総選挙で衆議院議員に当選していた田中正造はこの事件を国会に持ち出し、火を吐くような弁舌で政府に鉱毒の対策をせまりました。しかし、時の農商務大臣陸奥宗光は、



責任を認めようとはしません。しかも、鉱物の流出を防止する粉鉱採集器を設置すると、  
言い逃れまでします。

#### 一・四

農民たちが粉鉱採集器について寄り合い話をしていますが、どうやらその機械は鉛毒を  
防止する機械のようではありません。しかも、設置されるのは一年半後だということです

#### 一・五〈解説者による〉

解説者が、足尾銅山や鉛毒事件についての解説とそのウラ話をしてくれます。その  
中で注目すべきことは、陸奥宗光は次男の潤吉を足尾銅山・古河鉱業社長、古河市兵  
衛の養子に出していたということです。

#### 一・六（場面は国会にうつります）

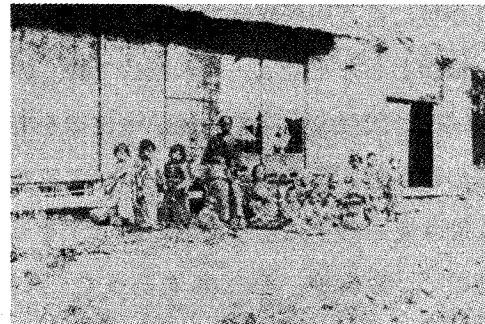
正造は政府に対し、さらなる追求をします。

#### 一・七

役人が言葉巧みに、農民に対して示談（先生方、説  
明願います）をもちかけてきます。中には言うこと  
を聞いてしまう農民も……。

#### 一・八

一人、二人と、示談に傾いてしまう仲間を説  
得するため、正造と農民は奔走します。



鉛毒被害でやつれきっと婦女子

#### 一・九

あの手この手で強引に示談に持ち込まれ、農民たちは困り果ててしまいます。

#### 一・十

古河鉱業は権力を傘にきて、強引な脅しと買収をはかつてきます。

#### 一・十一〈解説者による〉

公害訴訟問題についての解説とウラ話をしてくれますが、みんなの知っている水  
病公害訴訟についても解説をしてくれます。

#### 一・十二

被害地でも上層部の地主たちは、示談へと寝返り、とうとう下層農民が闘いの先頭へと  
押し出されていきます。そしてとうとう、農民は国への不満を吐き出し合い、農商務省へ  
行くことを決意します。

## 一・十三

正造はこれを説得し、制止します。そして、自らの地位とひきかえに交渉に行くことを約束するのでした。

## 一・十四〈解説者による〉

上京撤退の状況についての解説ですが、結局この交渉も全く聞き入れられませんでした。

## 一・十五（場面は国会と川俣事件の現場へとうつります）

農民たちは、明治三十三年（1900年）、たびかさなる大洪水の被害にたえかねて三千人の隊列をくみ、東京に押し出して、古河鉱業の操業停止を要求します。しかし、逆に三百名の抜刀した警察官、憲兵らの妨害にあい、百余名の農民が逮捕されてしまうのです。これが世に言う川俣事件です。

憤然とした正造は、一人国会で闘うのでした……。

「国家は国民を保護する憲法や法律を持っていながら、何故、被害民を忘れ、古河市兵衛をのみ保護するのであるか！……よろしいか諸君！古河の鉱毒は作物のみならず、いまや、人間さえも殺すに至っておるのでぞっ……古河市兵衛に、人民多数が殺されておるといふのに、政府が、その仇をとってくれないとするのであれば、しかば、人民自らが、人民自らの手によってその仇をとるよりほか、致し方ないであります。……略……これは渡良瀬川沿岸四十万農民の悲願でありひいては立憲政治の土台を危うくする国家浮沈の問題なのであります。よって、田中正造は本日限り……憲政本党を、脱退いたします！」

大臣諸君、どうかこの、田中の衷情をお汲みとり下さって、被害農民保護のため、なにとぞ、責任ある御答弁を伏して、懇願致します。さあ、御答弁下さい！」

しかし正造は、腐敗した政・財・官の癌着によって、所詮、国会が好き勝手にあやつられていることを思い知らされるのです。

## 一・十六〈解説者による〉

川俣事件とその後についての解説やウラ話と、第二幕の予告です。



谷中村強制破壊直後の光景  
(竹沢友弥宅、1907年)

## 第二幕

### 二・十七 〈解説者による〉

古き良き昔の回想シーンです。

### 二・十八

川俣事件以後、打つ手がなく困り果てている農民たちに、谷中村が貯水池にされる話が浮かび上がります。

### 二・十九 〈解説者による〉

谷中村貯水池問題の真相とその後についての解説やウラ話です。

### 二・二十 《正造と解説者》

主に二人がやりとりをする中で、当時の状況についての解説をしていきます。

まずは、川俣事件後の法廷闘争、それから聖書との出会い、そして周到に準備をした上で命をはった天皇直訴。この事件をきっかけに、世論はふっとうし、全国の勤労人民やキリスト教徒、それに河上肇、石川啄木らの知識人、学生らの間で支援運動がまきおこります。窮した天皇政府は、いったん逮捕した正造を釈放し、世論の沈静化を画す一方、卑劣きわまりない攻撃をしかけてきます。谷中村を買収して貯水池をつくり、洪水を調節するというのです。一府四県四〇万農民の問題を谷中村一ヶ村の浮沈問題にすり替える大陰謀だったのです。

### 二・二十一 《正造と解説者》

ちょうどその時、日露戦争が勃発します。日露という列強どうしの海外領土や権益の奪い合いの戦争に、反対農民を強制的にかりたてていきました。そしてとうとう六十三才の正造は、地位、財産すべてをなげうって谷中村に住みつき、農民たちと闘いを共にすることになります。

### 二・二十二

日露開戦に乗じての強引な土地買収について、農民たちが寄り合い話をしています。

### 二・二十三

強引に土地収容法を盾に迫ってくる役人に対し、正造と農民たちは、あくまでも抵抗を続けます。

### 二・二十四 〈解説者による〉

この当時の正造について、解説されます。

## 二・二十五

それでも実際の生活は苦しくなる一方でした。たまらず、村を逃げ出す同士もでてきます。固い契りを交わしたにも関わらず、断腸の思いで村を去らなければならない同士の思いは、正造の心に深く刻まれていきます。

## 二・二十六

その時、足尾銅山の労働者たちが、苛酷非情な労働条件に怒りを爆発させ、火薬庫をダイナマイトで爆破させると、足尾の金山を火の海にしてしまいます。

### 二・二十七 《正造と解説者》

大暴動の時、軍を出動させ戒厳令を発令したのが、古河鉱業元副社長である内務大臣原敬でした。この大暴動についての解説とウラ話をしてくれます。

そして、正造の訴えも……。

「若い諸君……田中正造、若いみなさんにお願いがあります。青年に新思想ありと言えどもである。『実物に当てて研究せざれば、光を放つなし！』みなさんがせっかく学んだ新しい思想、その新思想をどうか闘いの実践の場において役立てていただき、「万民共生」、抑圧も搾取も、一人の生命も軽んずることなき人民による人民の政府樹立のため立ち上がっていただきたい。どうかこの、無学無能の老いぼれの……この老いぼれの仇を、若いみんなの、知恵と、力で……」

## 二・二十八

明治四〇年(1907年)政府の強制撤去にもひるまず、農民たちは仮小屋を建てて十年にわたる抵抗を続けます。

## 二・二十九

谷中学・初級生から学びつつ、田中正造は彼らの中に明日の日本を見ます。そして正造は、人々のためにその生命を燃やしつくし、七十三年の生涯を終えます……。

「『亡国に至るを知らざれば、これ即ち、亡国！』このままでは日本の魂が腐る。いま、この、日本の亡国を救わんとせば……資本と、権力に奪われた、われら、人民の……人民の権利を……人民自らの手で奪い返す。これのみである！」

## 二・三十 (最終場)

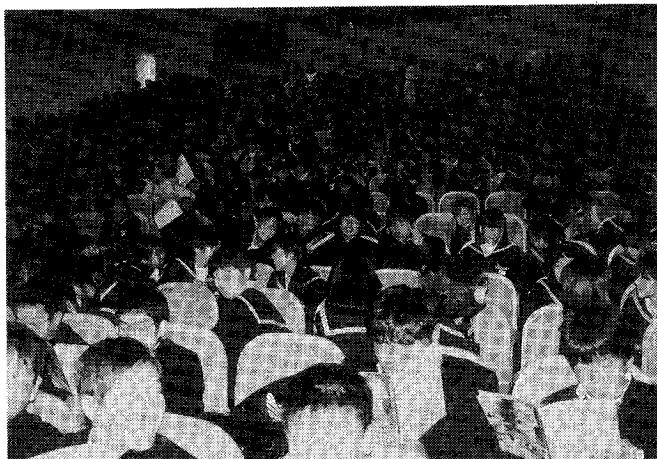
臨終の枕辺に残されたものは、つかいふるしの菅笠と頭陀袋でした。そして遺言ともいうべき言葉……。

「同情ということにも、二つある……この、田中正造への同情と、正造の問題への同情

とは、分けてみなければならぬ。皆さんのは、正造への同情であって、問題への同情ではない……問題から言う時には、ここもまた、敵地でがす。」



田中正造が住んだ谷中村の仮小屋（1907年）



「亡国の構図」観劇



劇団のみなさんと